

ベトナム戦争によるコミュニティの分断と回復の過程

The process of community fragmentation and recovery from the Vietnam War

板東 充彦
跡見学園女子大学
Bando Michihiko
Atomi University

高橋 紀子
福島大学
NorikoTakahashi
Fukushima University

坪井 善明
早稲田大学名誉教授
Tsuboi Yoshiharu
Professor Emeritus, Waseda University

飯嶋 秀治
九州大学
Iijima Shuji
Kyushu University

要 旨

本稿は、2019年9月29日、跡見学園女子大学で行なわれた坪井善明先生の講演をまとめたものである。講演の要旨は下記の通りである。

1975年のベトナム戦争終結後に生まれたボートピープルは、成功率10%だった。それなのに実行してしまう点に精神の荒廃が表れていた。戦争のつらさは全員が体験しているため、ベトナムの人たちは「私は苦勞した」とは言わない。特に外国人に対しては、恥の感情もあって言わないから、真相をつかみづらい。外国人は、言葉の問題も抱えているしその国の背景も知らないから寄り添うことが難しいけど、それができると彼らは信頼を寄せてくれる。

1989年初頭、私が現地へ赴任したとき、戦争以来精神を病んで電線から大使公邸に入り込んだ人がいた。でも、そのような人ばかりなので、それが問題とはならなかった。現代においても、傷病者へのケアの体制は不十分で、精神病院もない。でもコミュニティでは、障がいをもっている人たちに対して、みんな他の人たちと同様に接する。コミュニティ全体が開放病棟のようだ。

ベトナムは大陸国で、栄枯盛衰を繰り返したために国の大きさが変動した。そのため、国民の移動性が高く、土地に執着しない。家族の概念は日本より大きく、その家族が世界中にいる。若い世代はSNS等を駆使して海外ネットワークを広げ、国際的状況をよく捉えている。基本的人権や自由への意識も高い。1968年に韓国人による虐殺があったハミ村では、韓国人とベトナム人が協力して新しいコミュニティづくりに取り組んでいる。人は豊かになることで、自分以外のことも考えられるようになる。コミュニティ再生のためには、経済発展が大事である。現在のベトナムの人たちは非常に前向きな意識をもって、そこに展望がある。

その一方で、日本は劣化している。物怖じして、世界を知らず、内向き。ベトナムの分析を通して、日本社会と日本人一般の考え方を根本的に変えていかなくてはならないと考えている。

【Key Word】 ベトナム、コミュニティ、分断、回復、日本

1. はじめに

本稿は、2019年9月29日、跡見学園女子大学で行なったコミュニティ・ソーシャル・アプローチ公開研究会での坪井善明先生の講演をまとめたものである。

坪井善明先生は、1982年パリ大学社会科学高等研究院で課程博士（社会学）を取得した後、1982年から北海道大学法学部に着任された。1989から91年にかけて、在ベトナム日本大使館専門調査員として外務省に出向し、1997年、早稲田大学政治経済学部教授、政治経済学術院教授に着任。2019年に定年退職し、早稲田大学名誉教授となった。

著書には、『ヴェトナム－「豊かさ」への夜明け－』（岩波新書 1994）、『ヴェトナム現代政治』（東京大学出版会 2002）『ヴェトナム新時代－「豊かさ」への模索－』（岩波新書 2008）等がある。1988年に出版された『フランスと中華帝国に対するヴェトナム帝国』で渋沢・クロデル賞を受賞し、1995年の『ヴェトナム－「豊かさ」への夜明け－』では、アジア・太平洋賞特別賞を受賞した。

2. 講演

ベトナムのことを話すときに、基礎知識も伝えておかないと、コミュニティ論の話も理解が変わってくると思います。そこで、その話を最初にします。

ベトナムは儒教文化圏の中にあって、政治体制等はいわば中国を手本にした王朝体制でした。仏教もあるし、儒教も、道教もある。お箸でご飯を食べるといったところも日本と似たところです。

違いとしては、例えば日本の農民とベト

ナムの農民で何が違うかという点、ベトナムの農民はその土地に執着しないのです。移動性が高い。日本の場合は耕作地が先代々耕作するから、皆その土地に戻りたい。そして、日本は列島であり国が変わったりしないイメージですけど、東南アジアの社会というのは、国が興ったり消滅したりしました。アンコールワットを建設したクメール帝国（802-1432）、現在の国で言うとカンボジアの帝国があって600年以上存在しましたが、それが15世紀中葉に消滅します。その間でラーンサーン王国（1353-1580）というラオスの国が大きくなって、それがまた16世紀に消滅します。現在のベトナム中部地方にはチャンパ王国（192-1471）があって、それが15世紀にベトナム王朝によって倒されます。このように、諸民族の諸王朝が栄枯盛衰を繰り返したので、国の大きさというのが伸び縮みするのです。ベトナムは大体10世紀、1000年の単位で南へ伸びています。

クメールの人は、「カンボジアは絶対チャムになりたくない、チャムみたいに地図上から自分の国が、国名が消えるのはすごく怖い」と言います。日本の場合は、占領とかがあっても、日本の国名が地球上から消えることを心配している日本人はあまりいないと思います。しかし、大陸の国の場合は国がなくなるという心配がある。逆に言うと、人が動く。だから、必ずしも土地に執着しない、移動性の農民が多いのです。

日本の場合、福島で大変なことになっても、おじいちゃんおばあちゃんは故郷で死にたいから、どうしても戻りたいという望郷の念という土地への執着がすごく強く

あると思います。しかし、ベトナムの場合は必ずしも戻りたいとは思わない。

また、ベトナムの村は非常に強固な自治組織を持っています。村の中心には「亭(ディン)」という集会所があって、長老が合議制でものごとを決めていきます。年金等の社会的な安全保障がない時、自然災害に対処する時にコミュニティが強く機能します。そして、家族も非常に繋がりが強いのです。ベトナムでは家族の概念が大きくて、嫁さんの弟の嫁さんの子ども等、血は全然つながってなくても家族となります。社会保障等、公的な制度はほとんど整っていないので、一番信頼できるのはこの拡大家族。プラスそこでよく顔を知っている近隣のコミュニティの人たちというのが、生活の基本として、安全保障として機能します。

ベトナムでは、誰も助けてくれないから、問題の解決能力等の生きる能力が個人として高いなという感じが強くあります。逆に日本は、行政とか周りが助けているので、みんな指示待ち人間なる。最後は自分でやらなくてはいけないことを、人任せ、外部からの救援任せになっている部分がすごくあるのではないかという感じがします。

そして、ベトナムには戦争の傷跡が強く残存しています。戦争被害というのは、物理的に殺し合うとか、傷つくとか、田畑がだめになるという、物理的な兵器による損害というのが勿論ありますが、ベトナム戦争の場合、北と南に国が二つにイデオロギーで分かれた内戦がありました。同じ民族が戦うという意味で同様な韓国・北朝鮮のケースも同じですが、人と人とで傷つけ

合うという、傷つき方が多様に存在します。物理的に戦争をやる時にも、例えばアメリカにとってベトナム人は、ベトコンか南ベトナム政府の味方の人間かはほとんど区別がつかない。ソンミ村の虐殺では、米国兵がパニックになって結局虐殺してしまった。アメリカ軍は、ベトコンと普通の住民の区別もつかないので、村ごと囲いを作った「戦略村」に移住させて、ベトコン活動をできないようにした。そういう意味で、村がいれば兵器、爆弾、特に火炎放射器やナパーム弾で焼かれたり、いろんな傷つき方をした。

なぜあんなに多く1975年から80年の前半まで、ボートピープルが出たのかというと、旧南ベトナム政府の職員や軍人の子どもたちは大学教育を受けられなかったという事実があるのです。子どものために、とにかくここにいても未来はないというのでボートピープルになる。成功率10%です。成功率10%でやると言うのは普通では考えられない低確率ですが、逆に戦争で生きてきた人にとっては、良い人ばかりが亡くなっていく一方で、自分はただ強運だから生き残ったのだと思っている。自分は多分強運だからと考えて、10%の成功率に賭ける。それが精神の荒廃を表しているのだと思います。つまり、命の価値を10%の方に賭けると言うのは、理性的な判断ではありません。統計的に10人のうち9人が死ぬというのなら、普通はその判断をしないですよ。

ある時、私の父親のような立場の人から、「実は日本人が嫌いだった」と言われました。若い頃、夜にハノイで自転車に乗っていたら、日本の憲兵隊が逆走してきた

と。つまり、ベトナムの宗主国であるフランスと日本では車の進行方向が逆なので、日本人が逆走してきたのです。それから、その人は次のように言いました。「自分の方は何も悪いことはしていないのに、ぶつかってきた憲兵から『バカやろう』と殴られた。それから、日本人ってこんなに乱暴で暴力的なのかと、ずっと恨みを持っていた。でも、日本の文学や絵を見ていて、日本も悪くないなと思うようになった」。いつ日本の誤解が解けたのか尋ねると、「お前と仕事をして5年間くらい経ってようやく、日本もいいなと思えるようになったよ」と。

また、あるおばあさんは、親しくなった後で、「実は、日本軍に焼かれた家があるけど、あの賠償は何かできないの？」と話をしてきました。本当の話聞くことができる程度は、特に心に傷を持った人に対しては、どれほど寄り添うことができるかにかかっています。外国人というのは言葉の問題も抱えているし、その国の歴史的な背景も知らないから、寄り添うことが難しいのです。寄り添うということは、日本の中でも簡単なことではないですけど。

1989年初頭に大使館の専門調査員として現地へ行ったときに、「大使公邸に賊が侵入した」と緊急の召集がかかりました。電線を伝って人が大使公邸に入ってきたと言うことで、被害はないかと大騒ぎになりました。でも、よく調べてみると、その人は少し精神が病んでいて、戦争の時代に「ホーチミン・ルート」というラオスとの国境沿いにある森で、敵軍を監視するためにいつも木に登っていたということでした。それで、意識的か無意識的か分からな

いけれど、よく分からないままに電信柱に上って、電線を伝わって動き回っていたようです。戦地から帰って来た後に精神に支障をきたしたのです。そのため、悪意は全くなく、「たまたま日本大使館の公邸に入ってしまった」ということで、一件落着となりました。それで罪にならないのかと尋ねたら、「だって、そんな人は一杯いますから」という話で（笑）。今度はベトナムの精神病院について尋ねてみたら、「いやいや、そんなのいいです」と。

ベトナムにも、厚生省に相当する部局があり、社会福祉・労働・傷病者省と言います。その対象は、軍人だけではなく、戦争で傷ついた人たちも含みます。彼らのケアをする部局ではありますが、対象者が多すぎるのです。そのため、例えば小指と薬指が吹き飛ぶくらいのことでは、障害には含まれない。「動けるならまだいい」という感覚なのです。障害手帳もあります。でも、その受給はお金ではなく、お米なのです。月額13キロ位です。でも、ベトナムのお米は安くて、1キロ約10円くらいなので、13キロというのは130円程度のものなのです。

ベトナム人の精神面について尋ねると、次のような返答がありました。すなわち、施設もないのだけれど、そのように心が傷ついた人は大勢いるから、いわばコミュニティ自体が開放病棟のようなものだ。「障がい児は宝子だ」というように、障がいがあると分かっている、他の人たちと同様に接していく。すると、10年も経つとおよそ治癒されていく。特別なことをしなくても、多くの人たちが元気になるということです。

逆に、日本では病院へ行くと病人として指定される、とも捉えられる。でも、ベトナムでは病人がたくさんいるので、コミュニティの開放病棟で過ごせば、自然治癒力で治るという話なのです。「日本ってそんなに精神病棟みたいな作るのですか」と不思議がられて、逆に「ベトナムでは美味しい食事ときれいな空気と人の優しさで治ります」と言われました。

近代的なことをするのは却って場違いのような感じがします。ベトナム戦争後15年経った1989年に、私はベトナムへ行きました。そのとき、戦争の傷跡を数多くみましたが、それを隠蔽しているという印象もなく、障がい者に対するケアを積極的に行うということでもありませんでした。

ただし、例えばホーチミン市などは通りの幅が広くて、信号待ちが長いのです。そこをおばあさんが歩いていると、男の子が来て、自然に手をつないで向こう側へ渡って行きました。そこで、私が「君のおばあさん？」と聞くと、見ず知らずのおばあさんとのことでした。ベトナムの人たちの感覚では、お年寄りが歩いているときに助けるのは当たり前、ということなのです。バスに乗っても、おじいさんやおばあさんがいれば、若い人たちはみんな立ち上がります。それが当たり前なのです。

そのような文脈の中で、あれほどの長い戦争による心の傷つきに対してどのようにしているのだろうと思ってベトナムの人たちに尋ねると、戦争のつらさを語ってくることがあります。1979年に中越戦争が起こって、その後には国際的な経済制裁も受けました。豊かだったベトナムが飢饉になり、石油を止められ、バスもトラックも動

かなくなり、食糧輸送が滞りました。「あのときの飢饉はつらかった」など、現在40歳くらい以上の人たちにはそういう記憶があります。

私は、ベトナム人は一人一人が現代史だという言い方をします。それぞれが苦勞しているのです。様々な意味で、戦争の影響、貧困の影響、貧しさの影響を受けています。しかし、それはみんなが体験していることだから、「私は苦勞した」とは言わないのです。特に、外国人に対しては恥もあって言わないので、真相がつかみづらいのです。

でも、今のベトナム共産党は非常に大きな間違いをしていると私は思っています。例えば日本の場合は明治維新がありました。薩長土肥、困難な状況がある中、例えば勝海舟（1823-1899）や榎本武揚（1836-1908）などは、徳川の藩士でも才能のある人は積極的に登用しました。近代国家を作るためには、そのような人たちを十分に活用する必要があると言われます。「もう戦争は終わったのだから、もう一度国のために」と、かつては敵だった人たちを国に戻す。中国は今、アメリカの大学教員だった中国人たちに高額を支払って帰国してもらい、才能のある人を国に戻すということを実践しています。一方、ベトナムはそれを実践できていないのが大きな失敗だと思います。戦後ベトナムでは、北の共産党が南の人たちを追い出し、ポートピープルにしたのです。

ベトナムの南部では、ホーチミン市が栄えています。北部にはハノイがあるのですが、問題は欧米企業を入れないことなのです。北部は、中国と韓国と日本の企業しか

入っていない。南の方が、ナイキやインテルなど、様々なアメリカや欧州の企業が事業展開しています。

例えば、フランス人の責任者というのはベトナム人なのです。フランスへ移民して、ポリテクニクという高等教育機関を出た、いわばベトナム系フランス人です。だから、国籍はフランスなのですが、ベトナム人の顔をしているし、ベトナム語を喋ることができる。日本は、難民や移民を受け入れないので、ベトナム系日本人というのは少ないです。ところが欧米には、アメリカにもフランスにもベトナム人は大勢いるので、アメリカや欧州の企業を北に受け入れると、実はベトナム人が戻って来てしまう。北の共産党は、そのことを恐れているのです。外国から戻って来たベトナム人の方が、ずっと能力が高い。だから、彼らと勝負をしたら、現地の共産党系列の人たちが能力的に低いことが判明してしまう。彼らはそのようなことを極度に恐れているので、欧米の企業はなかなか北部に入って来られない。

だから、ベトナム戦争終結から44年が経過したのですが、民族的な和解ができてないという点が大きな問題なのです。南の人に「ハノイに行こう」と言うと、「私、ハワイは行くけどハノイは行きません」というくらい嫌っている。国レベル、そして人々のレベルでもまだ、北と南、共産主義と資本主義、そのイデオロギー的な民族的和解ができていないという点が大きな問題です。

コミュニティの再生に関しては、一つにはやはり経済発展を遂げていることが大事なのです。国が豊かになると、人々は自分

以外のことも考えられるようになります。1986年からのドイモイ政策で、多くの人たちがベトナムに帰って来ました。それに加えて、ベトナムは二人っ子政策を取っているのですが、農村部では規制が緩いので、3、4人子どもを産む家庭も結構多いのです。今、ベトナムはベビーブームで、1970年代の日本の高度成長の頃のような、前向きな意識をもっているのです。

貧しいタクシーの運転手さんに「大変ですな」と言ったところ、運転手は少しむきになって、「いや、貧しくないのです。ただ金持ちではないだけなのです。必ず、明日、あるいは将来、僕は金持ちになるから、全然貧しいとは考えていません」と言う。すごく前向きな言葉が返ってきました。

日本で、若い人に「どうですか?」と尋ねても、「ダメです」というコメントが多くの場合返って来ます。ベトナムとは全然違います」。1969年に、アン真理子が『悲しみは駆け足でやってくる』という歌で「明日という字は明るい日と書くのね」と歌っていました。往時の日本と同様な感覚が今のベトナムには、本当に同じ感覚があります。そこに、展望があるのです。

1990年代及び20世紀以降生まれのベトナム人・中国人・香港人などは、それ以前の世代とは基本的に異なっている点が2つあります。日本でも同じですけど、旧世代は貧しいということを感じているから、経済発展するにはある程度自由は制限されても仕方がないという、いわば開発主義的な発想が結構残っています。しかし、新しい世代は、基本的な人権とか自由の方が尊いと思っている人が圧倒的に多い。だから

ら、17歳のスウェーデンの女の子のグレッタ・トゥンベリさんが「我々の世代の環境を壊すな。このままでは我々の未来はない。大人は何もしてくれない」と怒って地球環境の保護を訴えている。このように、アジアでも上の世代とは異なる人たちが増えてきているのが現実です。ベトナム人でも香港のデモに参加するというのは、それほどおかしいこととは思っていません。

2点目は、SNSを使うスマホ世代なので、ベトナムは中国ほどお金をかけて規制できないという事情もあって、FacebookもTwitterも事実上解禁されています。だから、ベトナムの人たちは世界のことを知っています。先ほどお伝えしたように、世界中に家族がいます。その人たちと、Facebookなどでつながっているから、現在の自分たちの状況や政府のことをみんなよく分かっているのです。世界中に400万人いるベトナム人たちは結構豊かになってきていて、年間約100億ドル、日本円にして1兆数千万円が海外送金として送られてきています。共産党や政府にとっても、それを止めるとお金がベトナムに入ってくないから、それはしっかりと届けるようになっています。そのうち7割が南の方に行っていて、コミュニティの再生という点では、日本よりも、SNSを使ったバーチャルな共同体の再構築になっている側面があります。最近ではベトナムも海外旅行が緩和されてきて、そのために32万人も日本に来ています。海外旅行をしたり、海外の親戚縁者と情報交換をしたりしています。

クアンナム省のハミ村では、1968年に韓国人による虐殺がありました。その村の若い人たちが中心となって、韓国人とベトナム

人が協力して新しい形のコミュニティを作っています。図書館や集会所などを含めて、もう一度、村の建設に取り組んでいます。

そのような意味で、戦争を知らないけれども、基本的人権や自由、そして国際的状況をよく知っている若い世代が中心になって、IT技術を使いながら様々な形で国作り・地域作り・まちづくりが実践されています。このように、この3、4年で状況は大きく変わりました。

今、ベトナムで多くの日本の中小企業が事業展開しています。東南アジアの商工会の企業数は、ベトナムがタイを抜いて一番になっています。でも、ベトナムに最近工場進出をしようとしている日本の中小企業の人に「ベトナム人の中にはすごく頭のいい人もいます。もしかしたら日本が追い抜かされる可能性があると思います」と言うと、「いや、そんなことはありません。ベトナムは貧しくて単純労働しかできない国だし人びともそのレベルの人たちなので、日本を抜くなどありえない」という答えが往々にして返ってきます。往々にして根拠のない上から目線でベトナムを見ています。20年以上前のベトナムのイメージを崩さない、崩したくないという日本人が大勢います。

結局のところ、日本が世界の新しい動きなどを捉えられていなくて、内向きであることが問題だと思います。日本人は日本のことを日本だけで解決するというような固定観念が強い。だからこそ、時代に取り残されて、問題が何も解決されていないのです。

小泉進次郎環境相をはじめとして、環境

省の官僚たちも、国連総会で環境問題などを聞かれたときの準備を十分にしなければならぬことぐらい、プロフェッショナルであるなら分かるはずなのです。でも今、それもできていない。日本は、様々な点で劣化していると思います。物怖じして、世界のことを知らなくて、内向きで、少子高齢化という状況でも全く対策がない。新しく雇用を生む産業政策もベトナム人を含め外国人労働者が安心して働く環境を提供していない。それ故、以上説明したように、

ベトナムの現状分析から、現在の日本社会と日本人一般の考え方を根本的に変えていかなくてはならないと、つくづく考えています。

付記

本稿の構成にあたっては、これによる不利益の有無に十分配慮して構成を行った。また、筆者らには開示すべきCOI状態はない。